

本部半島ジオパーク現地審査報告書

審査員：中田節也・杉本伸一・宮城 敏

期間：平成 25 年 8 月 7～9 日

主な参加者(所属)：尾方隆幸(本部半島ジオパーク推進協議会)、千村次生(本部半島ジオパーク推進協議会)、知念秀樹(本部半島ジオパーク研究会 ガイド)、竹内 浩(与論郷土研究会)、富士川浩康(与論島役場)、麓才良(与論町議会)、田畑克夫(ヨロン島観光協会)、町岡安博(ヨロン島観光協会)、高良文雄(本部町長)、平良武康(本部町副町長)、中宗根清二(本部町教育長)、田中英治(本部半島ジオパーク推進協議会)、松田泰昭(本部町商工会)、安里孝夫(本部半島ジオパーク推進協議会)、知念 毅(本部半島ジオパーク推進協議会)、山内道美(グスクを学ぶ会)、高良 睦(伊平屋村)、上江洲清彦(伊平屋村)、玉城龍洋(沖縄工業高等専門学校)、仲里健(沖縄県立博物館)

見学・訪問地点

沖縄県立博物館・美術館、サザンクロスセンター、ハジピキパンタ、寺崎海岸、赤崎鍾乳洞、立長海岸、与論港、本部町役場、今帰仁グスク、運天港、名護サイエンスランド

現地審査のまとめ

1) ジオパークの名称とテーマ

沖縄島の本部半島、およびその周辺の複数離島を範囲とするジオパークである。ジオパークのテーマとして、「付加体とプレートテクトニクス」、「サンゴ礁と第四紀の自然環境」、「石灰岩の溶解とカルスト地形」を上げて、地球の営みを楽しみつつ正確に学ばせる視点は、地学教育的には重要に見えるが、構成自治体や地域住民が、それらのテーマを地域の誇りとして咀嚼した上での新たなテーマづくりが期待される。

2) ジオサイトと保全

本部半島地域は、ジオサイトの価値としては、日本や世界のこれまでのジオパークには見られない、「青い海とサンゴ礁」の素晴らしい景観をはじめ、約 2 億年前と現在の石灰岩形成の場を観察できるなど、極めて優れたジオサイトを有している。また、琉球列島の島々を舞台に発展した独特の伝統的な琉球北部文化圏(やんばる)は、この地域がジオパークとして発展する土台としては極めて優れた可能性を秘めている。地質的な連続性とともに、歴史文化的な共通性を重視した「やんばる」地域をジオパークのエリアとし、サンゴ礁の美しい海を題材としたジオサイトは、世界的にもユニークで大変魅力的である。

本部半島とその周辺地域には、現地性のサンゴ礁がつくる石灰岩と海成段丘が広く分布し、これらの岩石や地形は、第四紀の自然環境を考える良い教材となっている。本部半島には、中・古生代の石灰岩が溶解したカルスト地形、特に円錐カルストと星形ドリーネの組み合わせからなる独特の景観が形成されており、これらの景観は風化作用がつくる地形を考える良い教材になっている。

保全保護については、今帰仁グスクジオサイトが世界文化遺産に指定されているほか、本部カルストおよび辺戸岬の両ジオサイトは沖縄海岸国定公園に、与論島ジオサイトは奄美群島国定公園に指定されているだけでなく、地域の生活と密着したサンゴ礁や礁池などは地元住民により保全されている。ただし、本部町の石灰岩の砕石場跡地が産業廃棄物処理場の第一候補地となっていることを伺った。ジオパークとして相応しい対応について、地域でじっくり議論していく必要がある。

3)教育・研究活動

研究に関する活動は、琉球大学を中心メンバーとする「琉球列島ジオサイト研究会」が担当している。研究会は、ジオパークを目指す地域に対する学術的支援と、地球科学のアウトリーチとサイエンスコミュニケーションを図る専門家チームとして、琉球大学を中心とした研究会である。

教育に関しては、島のことを知るため、島外から講師を招き、底力をつけていく活動などを行っている地域もあり、この学びのあと、中学を卒業する子どもたちを島立ちさせている。また、東大の学生による東大塾のフィールドワークも始まった島もある。さらに、沖縄工業高等専門学校とも連携し、小学生を対象としたサイエンスコミュニケーションなどジオパークを後押しする取り組みも既に始まっている。

4)管理組織・運営体制

ジオパークの運営主体である協議会事務局は、本部町立博物館内にある。本部ジオパークの協議会には、きちんとした役割分担を持たせた、分科会機能が存在しない。学術部会(琉球ジオサイト研究会)とガイド部会だけは存在するが、前者は全琉球地域を対象とした研究会であり、後者は2年前に発足したばかりで、琉球大学にその養成を任せている。また、琉球大学など学術が中心となった琉球ジオサイト研究会と本部半島ジオパーク協議会の役割分担が不明確で、両者の連携が不足している。

5)地域の持続可能な発展とジオツーリズム、ガイド養成

本部半島ジオパークでは、2010～2012年度にかけて6回のジオツアーが実施されている。これらのうち、大学の公開講座として実施されたものが2回、協議会・研究会主催で実施されたものが4回である。大学の公開講座として実施された2回のジオツアーは、2009～2010年度に琉球大学で開発された「ジオツーリズムのための自然環境教育プログラム」の試行的実践であり、ジオツアーの需要に対する市場調査も兼ねたモニターツアーである。その結果を踏まえ、2012年度に協議会・研究会の主催で4回のジオツアーが企画・実行されている。

ガイド養成については、琉球大学に委託し、大学の公開講座・公開授業として開講されるなど、ガイド養成のシステムが確立されている。琉球ジオサイト研究会のガイド部会には20名程度の登録がある。また、世界遺産の今帰仁グスクでは、グスクを学ぶ会の案内ガイドの方が石灰岩と沖縄の歴史を絡めて面白く説明されており、ジオツーリズムと呼べる内容であった。さらに、伊平屋島などでは、Uターンの女性が地域の活動をしたいなど、ジオパークの活動を進める上で期待できる素地がある。

6)国際対応

本部半島は、年間300万人が訪れる観光地であるが、世界遺産の今帰仁グスクなどにおいては外国人対応が考慮されているものの、他のジオサイトにおける解説板やガイドブックの国際化対応はまだはじまったばかりである。

7)防災・安全

この地域には、サンゴ礁の内側に「寄り石」と呼ばれる津波石が存在する。この石は、津波によりサンゴ礁の外側に有った大石が、サンゴ礁の内側に運ばれてものである。このような遺産を、防災教育の手段として活用することを期待する。